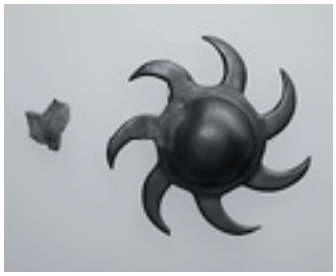
●コレクション・データ

時　　代　弥生時代　後期
調　　査　唐古・鍵遺跡　第23次調査
発 見 年　1985年
大 き さ　（左・実物）残存長2.65㎝、（右・復元品）復元径10.3㎝・復元高1.9㎝
展示位置　第2室・「青銅器をつくる」



唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション　48

スイジ貝を模した巴形銅器

今回は、国内で独自に作り出された巴形銅器を紹介します。巴形銅器とは、全国で100点以上出土している弥生時代から古墳時代にかけてみられる飾り金具の一つです。

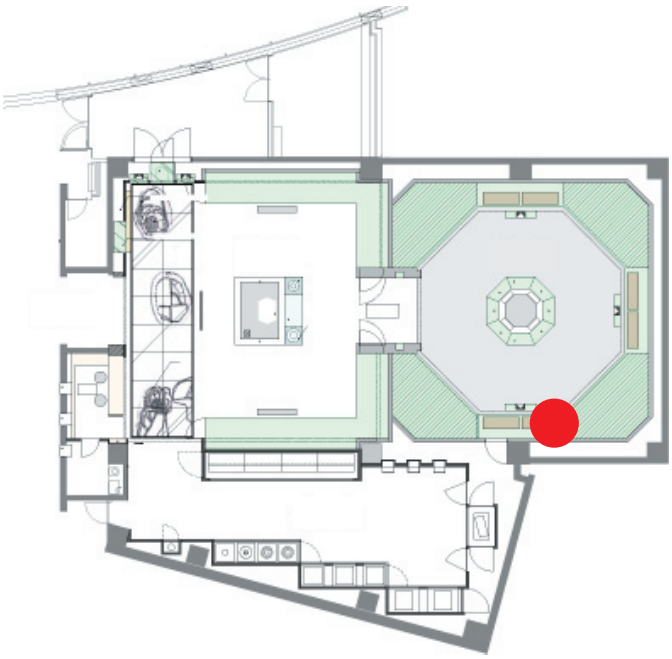
唐古・鍵遺跡から出土したものは約10分の1の小片ですが、復元すると、半球状の体部に左捩じりの扁平な七本の鉤状突起が放射状に取り付く形になります。また、半球形の裏側には棒あるいは瘤状の把手が付けられていたようで、紐を通して装着できるようにしています。

このような巴形銅器は、時代によって形態が違います。弥生時代のものは、半球形あるいは円すい形の頂部を平らにした形の体部に左捩じりの5～8脚がつくもの、古墳時代のものは円錐形の体部に右捩じりの幅広の4脚のものが多いようです。このことから、唐古・鍵遺跡のものは弥生時代の所産と分かります。

古墳時代のものは、大阪府和泉黄金塚古墳で巴形銅器を装着した革盾が出土し、その使用方法が分かりました。ただし、弥生時代のものは、甕棺に副葬される例や一括埋納される例などがあり具体的な使用法は不明です。

巴形銅器は朝鮮半島に類例がなく、弥生時代後期の北部九州で製作が始まった青銅器です。この地域では、沖縄など西南諸島で産出する貝類を腕輪とする風習がみられ、巴形銅器も西南諸島に生息するスイジ（水字）貝をモデルにしたとする説があります。スイジ（水字）貝の突起（鉤）には、魔除けの効果が想定され、呪力を秘めた貝として神聖視されたのでしょう。その形を模倣した青銅製品もまた、呪力をもっていたでしょう。

このように、弥生時代の人々は、神秘的な貝の形を、青銅製に写すときには装飾的なデザインにしましたが、その背景には当時の想いや信仰が隠されているのです。

唐古・鍵考古学ミュージアム
【☎34・7100】
開館時間　午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人　200円（150円）
▼高校生・大学生　100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置